

伊勢原警察署山岳救助隊安全登山講習会一実施報告

2024年4月8日

報告者：丹沢トレッキングクラブ（TTC） 鈴木貴久子

開催目的	安全登山に必要な知識、技術を現地実習を通じて習得する
開催日時	2024年4月6日（土曜日） 9時30分～13時20分
開催場所	大山阿夫利神社下社～16丁目～かごや道～下社
講師	伊勢原警察署地域課山岳救助隊 北條保徳隊長、零石隊員（敬称略）
参加者	19名（男性8名女性11名） 関喜義、坂本達治、佐藤眞理、今井華穂子、出田美樹、佐藤清、市川咲子（救護）、齋藤立樹、平井眞理子、山根博彦、川島英子、熊澤正明、大場重行、佐藤敬、大塚光代、山下貴美香（お試し参加）、河原愛理子、肥田美佐子、鈴木貴久子

講習内容	<p>1. 講習会開催までの経緯</p> <p>1月の拡大世話人会の席で、安全登山教室について討議した際に、世話人から近隣の警察署の山岳救助のエキスパートの方から講義をお願いしてはどうか、との案が出た。これを受け、2月下旬、伊勢原警察署署長様に手紙で要請したところ、数日後に地域課吉田課長（当時）から電話にて快諾のお返事を受けた。その後、同署山岳救助隊の北條隊長をご紹介いただき、当会鈴木が3月26日に伊勢原署を訪問。着任間もない地域課徳田課長、同横田さん同席のもと、北條隊長と講習について詳細の打ち合わせを行った。（以下敬称略）</p> <p>2. 講習内容</p> <p>―春の不安定な天候で傘マークが続く日々だったが、講習会当日の4月6日は曇り空ながら風もなく、気温16度と上々の天気。19名のTTCメンバーは、阿夫利神社下社階段下のさくら屋さんの前に集合した。フル装備（60～70Lはありそうなザック、腰回りにはカラビナ・スリング・エイト管といったクライミング用品、レスキュー用品がびっしり！）の精悍なお二人を前に一同圧倒される。シャツの上腕の“POLICE”の文字に若干緊張しつつも心はワクワクと、16丁目を目指して歩き始めた。19名と大人数であったため、途中数か所ある開けた場所で立ち止まり、隊長は管轄山域での遭難事故の事例、活動などをオープンに話してくださった。講習で隊長が教示された内容は以下のとおり（順不同）</p> <p>―県下の山岳地域を管轄する6つの警察署の中で、伊勢原署は松田署について2番目に遭難救助件数が多く、昨年は47件の出動があった。大山はケーブルで下社まで一気に昇って来ることができ、そこで“1時間半で山頂”の看板を見て、装備・準備不十分のまま安易に登頂を目指す観光客があとを絶たない。遭難事故の原因は「疲労」に尽きる。事故の中でいちばん多い道迷いも、疲労困憊して来た道を登り返す気力が尽き、正常な判断ができず、もうろうとした精神状態に追い込まれて事故につながっている。自身の体力に見合った計画と行動が伴えば遭難はまず回避できるはず。</p> <p>―救助した登山者で、事前に登山届を出したケースは皆無。換言すれば、登山届を作成するには事前に登る山についてリサーチし、計画を立て、準備する必要があるため、こうした手順を踏んでさえいればたいがいのアクシデントに対処でき、自力下山が可能であろう。</p> <p>―近年は紙媒体の登山届から、インターネットでの提出が増えている。神奈川県警でもYAMAPとCOMPASSと協定を結び、遭難時は県警本部から各サイトの運営会社から情報を得ている。神奈川県警のホームページからオンラインで直接神奈川県警に登山届を出すことも可能。経験豊富な登山者が率先して登山届の提出をすれば、ビギナーの登山者がそれに倣うことになるので、紙でもネットでも構わないので、TTCでもぜひ励行してほしい。</p> <p>―また、最近のスマホのGPS機能も非常に有益で、遭難者の場所の特定に寄与している。ただ、電波はいちばんつながりやすい基地局に飛ぶので、大山周辺の山中から連絡してきた本人の位置情報が（基地局がある）大磯と表示されることもあり、場所の特定には注意を払っている。救助要請の連絡が入れば、救助隊は時間を問わず現場に駆け付けることを基本にしている。救助隊員は普段は駐在所勤務をしており、出動要請に応じて隊を編成し集結する。ゴールデンウィーク、秋の行楽シーズン、ライトアップイベント等で登山客が多い時は下社境内の詰所</p>
------	--

で待機し、日に数件に上る出動要請に迅速に対応できるような体制をとっている。

—16 丁目では隊の装備品を使って怪我人を搬送する方法のデモンストレーションを見せていただいた。テープスリング（幅 2 センチ、長さ 150 センチ）とロックカラビナを使って怪我人を背負う方法も教わり、実際に女性メンバーが試してみた。この 2 点を標準装備に加え常に持参することを推奨された。

—県警航空隊にヘリコプターによる遭難者の救助要請をすると、横浜市金沢区のヘリポートから 5 分で現場上空に到着する。熟練した有能な救助ヘリのクルーをしても上空からは事故現場を特定することが非常に困難。ヘッドライトを複数人で点滅するのがいちばん発見しやすい。ヘリによる救助が始まると、回転翼が十数キロのザックをも吹き飛ばすほどの強風が起り、非常に危険なため、特にヘリの前方と真下から迅速に離れるように。

—登山者の遭難・事故に遭遇した際は、伊勢原消防署（119 番）または伊勢原警察署（110 番）に連絡をいれてほしい。両署間で連携している。消防署は傷病者への対応と搬送を任務とし、通常 3 名 + 7 名の体制で出動する一方、警察署は遭難者の救助活動を、案件によって基本的に 2 名から 5 名体制で対応する。

—県警では今後登山者向けアプリ運営会社の協力を得て登山者の歩行記録や遭難状況を共有し、安全対策を強化していく方針。

—大山に登山で訪れた際は、普段から山中に道標や看板を注意してみてほしい。大山の“00 丁目”表示を意識しておく。また、伊勢原警察署が設置したポイント番号（No.）についても留意してほしい。例えば秦野市との境界線付近には伊勢原署と秦野署がそれぞれに設置した道標・サインがある。遭難の一報を受けた際、場所の特定にどちらの署が設置した標識なのかの確認に必要となるので気を付けてみてほしい。通報時に正確な情報が提供されれば迅速な救助活動の大きな助けとなる。

—登山者の滑落現場に遭遇した場合はまず冷静になり、自分でむやみに救助行動を起こさないこと。以前、一人が滑落した現場に二人が助けようと行動して立て続けに滑落し、都合 3 名の救助をすることになり、本末転倒の結果を招いた例があった。

—水は常に多めに持っていくこと。最低でも 2 リットルは用意する。飲料用の用途以外にも、傷口の洗浄にも使える。同時にお湯も持参すれば、耐熱のポリ袋に入れて湯たんぼとして活用できる。低体温症で震えを通り越して危ない状態の遭難者には心臓を温めるとよい。低体温症は冬期だけに起きるわけではなく、通年起こりうる。

—16 丁目から蓑毛方面にしばらく下り、下社と蓑毛方面の分岐に差し掛かる地点で道迷いが頻発している。下社に向かってすぐのところの沢に下る脇道があり、そこに入り込んで立ち往生するケースも後を絶たない。

—下社に戻り、最後にメンバーから北條隊長に、我々のようにグループで活動する登山者へアドバイスを請うたところ、隊長が以前にあるパーティのひとり救助した際、リーダーは誰か？と聞いたところ、誰ひとりリーダーの認識がなく、責任の所在が不明確なグループがあったそうだ。当該の事故について警察署からの連絡の窓口となる人が特定できず、困惑したとのこと。山行前にリーダー・サブリーダーをはっきり指名し、統率がとれた活動をしてほしい、とのこと。その後、雫石隊員の巨大ザックをメンバーがかわるがわる背負ってみて、約 4 時間に及ぶ実地の講習を終えた。

まとめ

—普段、書物や動画を通じてしか知りえない山岳救助の話であるが、今回現場の第一線で活躍されるエキスパートから実践的な知識を学ぶ貴重な機会を得た。北條隊長はこの道 26 年の遭難救助のベテラン。永年に亘る遭難救助の経験に裏打ちされたスペシャリストが語る生きた情報は重みとすごみが別格だった。今回の現地での講習で得た知識、技術はさることながら、それ以上に、過酷で危険な任務に奉職される救助隊の高い誇りと心意気に深く感銘した。参加したメンバーから質の高い講習と講師先生のプロ意識に対し感謝と尊敬の言葉が多く寄せられた。

—隊長は若手隊員の育成にも力を注がれており、雫石隊員のマッチョな体の維持へのたゆまぬ努力をいじりながらも誇らしく語っておられた。若い隊員の中には西丹沢ビジターセンター～檜洞丸間を通常早くても 3 時間かかるところをフル装備で 52 分で完登する（信じられない！）実力の持ち主もいるとのこと、心強い限りである。

—北條隊長、雫石隊員とも非常に気さくなお人柄。我々のつたない質問にも一つひとつ懇切丁寧に答えてくださった。日々の公務でお忙しいなか、お二人には準備から当日の講習実施まで、多大なご尽力をいただいたことは感謝してもしつけない。我々は今回学んだことを実践し安全登山を続け、よもや救助隊の皆様の手を煩わすことのない自立した中高年登山者を目指したい。また、微力ながら大山周辺での安全登山活動の一助になるよう、登山者の遭難や事故に遭遇した際には正確かつ冷静な通報・連絡ができるようにしていきたい。